

学力向上実践研究 推進校の取組内容

「わかる授業からわかり合う授業へ」

御所市立名柄小学校

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題への取組状況

数年前から、算数科を中心に児童が「わくわく」しながら目を輝かせ、やってみようとする授業を設定している。「ドキドキ」しながら、児童の興味ややる気が持続する授業を展開している。児童自らが「みつけた!」と気付き、発見のある授業内容である「わかる授業づくり」に取り組んできた。奈良県算数数学診断テスト結果の考察より、「読み取りの力が弱い」という児童の実態が明らかとなり、昨年度から「読み取り」を重視した研修を行ってきた。本年度はさらに一歩進み、児童が答えを出したプロセスを考え、なぜそう考えたのかを表現し伝え合う授業展開を創造してきた。次に主な取組を挙げる。

(1) 「ながらのちから」・県学力診断テストの実施と考察

早期のチェック機能として、児童一人一人の学習のつまずきを把握するために「ながらのちから」というテストを全校実施した。「ながらのちから」は読み取る力の実態把握を目的に国語、算数で実施した。国語は説明的文章で、低学年は時間や事柄の順序・内容、中学年は要約・筆者の書きぶり、高学年は要旨・筆者の見方、考え方を問う問題を選択した。算数は、前年度の既習内容から児童がつまずきがちな文章問題を出題した。国語、算数共に基礎基本に関わる問題を実施することによって、つまずきや習得の様子が見えてきた。

また、県教科等研究会が作成している奈良県学力診断テストを実施することで、観点別に学力到達度を把握し、各学年の過去の結果と比較推移を分析し課題を明らかにした。考察を有効に活用して授業を展開した。

(2) 授業ビデオカンファレンス

児童の実態把握と教員の授業力、授業構成等のチェックを毎学期行った。声の出し方・聞く姿勢・話す姿勢・学習態度・一斉指導の際等の児童の様子を見直す。児童の学びについてつながったところまたは停滞したところ、妨げとなっているところを児童の発言・教員の声かけ、支援やその原因等を探り、全職員の共通理解を図った。1学期のカンファレンスから、「聞く・話す」力についての課題が浮き彫りとなり、まずは学習規律の確立の必要性が見えてきた。

(3) 校内研修の充実

○ 授業研究

校内研修において「授業を見る視点を考えよう。」と、授業研究の際どのような視点で授業を見るのかを教員間で意見を出し合い共通理解を図った。また事後討議において

①決して授業の批判だけをしない。可能性の発見につながる意見を出す。

②授業の事実の中から今日の授業で自分は何を学んだかを語る。

③授業を公開した同僚への礼儀として、必ず全員が一言話す。

という姿勢で参加することを確認した。

・提案授業①：第2学年算数「三角形と四角形」(指導助言 椿本剛也指導主事)

ペアでの学習を取り入れ、互いの意見を聞く。またどのようにわかりやすく発表したらよいかを考える活動に重点を置いた。

・提案授業②：第6学年算数「拡大と縮小」(指導助言 椿本剛也指導主事)

I C T機器を取り入れ、グループ活動で拡大図を描き「拡大の定義」を自分たち

なりに考えた。図を拡大する際に機器を用いることで、視覚的に理解しやすく、児童の理解の促進が図れた。

○ 講師招へい

講師：元御所市立小学校教諭 大木文代先生

1学期のビデオカンファレンスにより出てきた児童の課題「聞く・話す」を中心とした学習規律の確立に向けてどのような取組をしていくかの研修を行った。

2学期に向けて共通理解を図ったこと

「焦らずに待てる教員！」

Step 1：(低・中) 必要なモノ以外出させない

机の上の整理 (落とさないよう工夫する)

Step 2：えんぴつは休み時間にけずらせる

Step 3：誰が話しているのか意識させる

みんなが向いたことを確認してから話す (教員も児童も)

(中・高) みんなにきいてもらうという意識付け

Step 4：静かになるまで待つ

余計なことはしゃべらない

一斉指示は繰り返さない (児童にリボイスさせる)

Step 5：教員が意識して反応する (大げさに)

★授業時間を守るために職員朝会の短縮化に心がける。→連絡黒板の利用

講師：元宝塚市立小学校長 小畑公志郎先生

各学年の授業を参観し、キーパーソンになる児童の指摘、ペア・グループ学習のポイントなどについてアドバイスしていただく。

(4) 日々の授業づくり

○ ペア・グループ学習の活用

児童個人の考えをペアやグループで聞き合うことにより個人の考えをより深めるだけでなく、わからないことを聞き合える学習集団づくりを心がけた。

○ ICT機器活用

児童の興味・関心を高める授業づくりの一つとしてICT機器を活用するために、簡易型電子黒板ソフトとプロジェクタを導入。それに伴い、計画的にデジタル教科書の活用も進めていけるよう、第2学年に国語のデジタル教科書、第6学年に理科のデジタル教科書を購入した。

(5) 研修週間

1週間に2時間オープン授業時間を設定し、意識して互いの授業を参観し合える環境をつくった。教員間で普段どのような授業を行っているのかチェックし意見交流した。

(6) 学びランドの設置

児童たちが体験を通して、算数科における質的・量的な感覚を豊かにする算数環境づくりとして設置していた「さんすうランド」をリニューアルし、「学びランド」とし算数科だけに限らず、その学びの幅を広げることにした。例えば、百人一首の上の句と下の句のカードを作り、カルタをするだけでなく裏には現代語訳をつけ、百人一首を知らない児童でも、その意味から上の句と下の句の組み合わせを考えるなど、一通りの使い方だけでなく、児童の自由な発想で何通りかの遊び方を考え出せるものを設置した。この「学びランド」では、同学年の学びやつながりを深めるだけでなく、学年を超えた児童の交流があり、コミュニケーションを図れる場としての役割も果たしている。

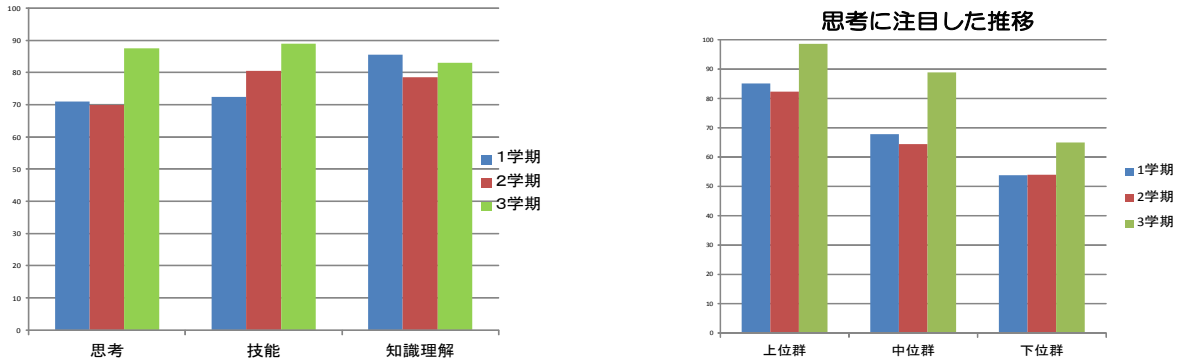
2. 調査研究の成果及び今後の課題

(1) きめ細やかな学力分析と学習形態の工夫

<成果>

一人一人のつまずきを踏まえた客観的な数値で児童の実態把握ができた。これまでも、県学力診断テストの数値分析は行ってきたが、「ながらのちから」の実施により、基礎的・基本的なつまずきの実態把握を行うことができた。また、二つ目の成果として、学習活動のポイントで効果的にペア・グループ活動を入れることにより、児童に学力がついてきた。

〈第5学年算数科における数値変化〉



一方的に教える→教えられる関係ではなく、「わからないから尋ねる」「尋ねられたからそれに誠実に答える」という活動の中で確かな学力が身に付き、わかる喜び・わかってもらえる楽しさを体験することで学習意欲や関心を引き出すこともできた。会話が成立していなかったペアも回数を重ねるうちにできるようになり、コミュニケーション能力や児童同士の信頼関係も高めることができた。

〈課題〉

小規模校という点を生かし、さらに一人一人に対応したきめ細やかな学習状況の把握を行い、それに対応した指導の在り方を探っていく必要がある。そのためには、学年が変わり、担任が変わっても児童一人一人の学習状況が把握できる6年間を通した“個人カルテ”の作成を検討するとともに、次年度からの活用を目指していきたい。また、現在は1対1のペアや小集団での学び合いが成立しつつある中、学級集団としての学び合いへどのように広げていくかということが今後の大きな課題となる。一人一人の学びが保障され身に付いた確かな学力を学級全体で共有できる授業の在り方を探っていかなければならないと考える。

(2) 授業設計の多様化

〈成果〉

I C T機器を使用した授業づくりを行い、単なる拡大提示にとどまらず、様々なコンテンツを活用した資料提示により、うつむきがちだった児童の視線を集中させる効果があった。また視覚化されたことで、学級全体で共通理解が図られただけでなく、個々の児童の理解を促進することができた。また提示した資料をカスタマイズすることで、「こうすればいい」「ああすればどうなるのか？」とシミュレーションすることが可能になり、それが学習を深化させ児童同士の学び合いが活発化された場面を多くつくった。

〈課題〉

I C T機器の活用についての学習効果は、教員の手応えや児童の反応・つぶやきであるため、数値を伴った客観的な指標ではない。今後は学習効果のデータの把握をしていかなければならない。また、機器の使用が「導入時であるのか」「問題を考えるときなのか」「押さえどころであるのか」など、どの場面で活用するのが最も効果的なのかについてや、「拡大提示のために使うのか」「指示や説明をするためか」「重要ポイントの印象付け」「シミュレーション」「板書代わり」など、どのような扱い方をするのが効果的なのかについて、計画をしっかりと行わないと機器に頼った授業に陥る危険性がある。また、いかに教員が機器を使いこなせるかというI C Tに関する活用力を高める点についても、克服しなければならぬ課題がある。今後も技術的研修と教材開発を計画的に行っていく必要がある。